

ベトナムの民族俗字「字喃」\*の構造とその淵源

富田 健次\*\*

Chữ Nôm, the Former Vietnamese Demotic Script  
—Its Structure and Origin—

Kenji TOMITA\*\*

‘Chữ Nôm,’ the former system of writing invented by borrowing the principles and forms of the Chinese character, really means “vulgar script” or “southern character,” in contrast to ‘Chữ Nho,’ meaning “Confucianist scholars’ script.”

I have been considering why ‘Chữ Nôm’ was not established as the Vietnamese orthography like the similar Japanese demotic script Kana but was replaced by ‘Quốc Ngữ,’ meaning “national script,” which was invented by modification of the Roman alphabet. Recently I noticed that as long as ‘Chữ Nôm’ depended to a large degree phonetically and semantically on the Chinese system it was impossible for most of the people, who were blinded

by their governor and had almost no chance to learn Chinese itself, to master it completely. And, paradoxically, just because it remained vulgar, its *raison d’être* was to express racial romanticism. In other words, almost all Vietnamese intellectuals, most of whom were bilingual, never hoped that the script would be fostered as a national orthography.

If this is true, it is evident that the script played a very important role in every sphere in Vietnamese history. Scholars of Vietnam should, therefore, comprehend its system and structure and, if possible, investigate its origin and how it changed in each period of history.

I は じ め に

ある民族の文字の歴史を見ると、その民族の経て来た足跡が透かし彫りにされていて興味深いものである。文字はその民族の歴史を鋭敏に反映するものなのである。

世界の諸言語の中で類を見ないほど複雑な組織を有する日本語の文字＝正書法も、その

例にもれず、日本民族の成立から今日までに至る長い歴史のシワを深く刻み込んでいると言える。「創造することなき日本民族」などと外国人に蔭口を叩かれる日本人が、その加工能力という最大の武器を縦横に駆使して中国文化をどん欲に吸収し、その文化の媒体であった漢字を見事に自家薬籠中のものにしてしまったことは余りにも有名なことである。日本民族の歴史の大部分が中国文化との格闘

\* Chữ Nôm.

\*\* 大阪外国語大学タイ・ベトナム語学科; Thai & Vietnamese Department, Osaka University of Foreign Studies, Osaka, Japan

の歴史であったことを、これほど如実に証言してくれるものがほかにあるであろうか。現代正書法に目を向けるまでもなく、漢字そのものは音訓両様に利用され、主として活用部分にはこれまた漢字を簡略化して字母化した「平仮名」を使用し、さらにまた外来のことば、外国語の読みにはこれまた漢字の一部をそのまま借用したり簡略化したりして作った「片仮名」を用いるという実に軽わざ師的表記法をいとも簡単に使いこなしているのである。ところが、このような複雑な組織が形成されるまでの過程は、上述のごとく実に単純そのものであったのである。

同じく中国文化圏＝漢字文化圏<sup>1)</sup>の一角を占める朝鮮に目を転じてみれば、日本が地理的に、海といういわば「クッション」を置いて中国と対峙し、比較的悠長にその文化を吸収することが可能であったのと異なり、朝鮮は陸伝いに中国と直接相對峙しなければならず、その文化的、政治的脅威は比較にならないものがあつたはずである。その言語の歴史

を見ても、日本人が中国語＝漢語を十分に客体化し「万葉仮名」や「書き下し文」などに見られるように、日本語に十分適合するような形で徹底的に利用し尽くしたのとは異なり、朝鮮語においては、言語の構造としては日本語と酷似しているにもかかわらず、そのような試みはごく限られたものであり、多くは生のまま、純粋な形で中国語を接受してきたと言われる。<sup>2)</sup>そして、この傾向が一転して民族言語の愛護へと変ずるには、1443年のハングル（大いなる文字）の創製を待たなければならなかった。この文字は周知のように日本の仮名とは全く異なり、たとえそれが漢語音韻学のベースの上に形成されたものであったとしても、全くの独創と言え、民族の見事な創作であった。以後、日本語と同様に漢字併用の時代が久しく続くが、1949年に北部朝鮮では漢字を全廃し、文字通り正書法の確立に成功している。この民族の文字の歴史にも、やはり中国文化との格闘の歴史の足跡が明白に刻印されていると言えよう。

## II 『字喃』の定義

漢字文化圏の一角を占めるもう一つの勢力は言うまでもなくベトナムである。東アジア文化圏と東南アジア文化圏のいわば間<sup>はざま</sup>に位置しているベトナムは、多くの民族の吹き溜りという点では日本とも相似た環境にあつたが、中国と陸伝いに相接するという厳しい地理的条件の面では、むしろ朝鮮のそれと酷似していたと言えよう。ベトナムも朝鮮同様、中国による長い政治支配の下に呻吟しつつも、その中から独自の文化を花咲かせたことは周知のことである。言語的に見ると、日本語と朝鮮語が孤立語的性格の強い中国語とは異なり、

アルタイ語的膠着性の言語であり、両者とも極端な言語的同化は受け難かったのに比べ、ベトナム語は中国語と同類型の言語に属し、常にその同化の脅威にさらされていたのである。<sup>3)</sup>その文字の歴史を見ても極めて象徴的である。紀元前111年に中国の支配下に入り、1075年に科挙の制度が始められ、漢字が正式の文字となって以来、1915年（中部では1918年）にその制度が廃止されるまで実に840年

1) このような呼び方については、亀井孝等編 1963.『文字とのめぐりあい』(日本語の歴史2) 平凡社; 藤堂明保 1971.『漢字とその文化圏』(中国語研究学習双書3) 光成館などを参照。

2) たとえば、河野六郎 1968.『朝鮮の漢文』『中国』第53号, pp. 8-17などを参照。

3) ベトナム語の構造については、三根谷徹 1955.『安南語』『世界言語概説(下)』研究社, pp. 833-870; L.C. Thompson 1965. *A Vietnamese Grammar*. Seattle; 富田健次 1977.『ベトナムの言語』『ベトナム』アジア・アフリカ研究所編, 水曜社などを参照。

もの間漢字を正式の文字、漢文を正式の文章としてきたのである。<sup>4)</sup>つまり、ベトナム人知識人にとっては漢文＝中国語に精通することは絶対不可欠の条件であり、極言すれば母国語を知ること以上に重要なことであったのである。そして文字を知るということは実は漢字を知ることにはほかならなかつたのである。

だが、一部の自覚した知識人の間に、日本人や朝鮮人同様、当然、自国語を表記したいという欲求が起こってくる。その時ベトナム人は日本人と同じようにすぐ手近にあった漢字を用い何とか工夫してこれを表記してみようと思いついた。それが『字喃』という文字の起こりである。<sup>5)</sup>

『字』は文字通り「文字」を意味し『喃』は「話し言葉の」もしくは「(中国に対する)南の」<sup>6)</sup>を意味し、全体で「話し言葉の文字」または「南(国)の文字」<sup>7)</sup>の意味を持ち、正式の文字である「儒学者の文字」を意味する「字儒」<sup>8)</sup>と対立する。<sup>9)</sup>

ところが、この試みは日本語のようには成功しなかつた。日本語は多音節の言語であり、

4) 三根谷徹 1968.「漢字からローマ字へーベトナムの文字」『月刊百科』70, pp. 13-28.

5) 『字喃』の発生は中国人によって先鞭をつけられたのかも知れない。たとえば、陳孚『使交州詩集』(黎貴惇『見聞小録』所収)14世紀初や『安南譯語』(『華夷譯語』中)14-17世紀(?)に見られるような中国人による表記法が先行し、のちに徐々にベトナム人による工夫がこらされたのかも知れない。富田健次 1978.『ベトナムの“民族俗字”「字喃」の研究方法及その意義』大阪外国語大学タイ・ベトナム語学研究室, pp. 3-4.

6) 「南風」を意味する現代ベトナム語は gió nồm であり、nồm が「南」nam の訛音とするなら chữ nồm の nồm も nam の訛音と考えることができる。

7) ベトナム人は自分の国のことを、中国＝北国<sup>ベッククオック</sup>に対して南国 Nam quốc または nước Nam と昔から呼びならわしている。

8) chữ nho または chữ Hán 「漢字」。(ベトナム語の語順では「字漢」)。

その音節一つ一つに類似した音形を持つ漢字を当てはめていくという万葉仮名方式で、文字と音の間に一定の約束を成立させ、同時に簡略化、字母化が図られた。その使用者にとっては一定の数の漢字もしくは簡略化された漢字＝平仮名をさえ記憶しておけば、それで十分、母語の一音一音を表記することができるのであり、必ずしも漢字そのものの音義にわたる知識は必要としない。しかし、ベトナム語の場合は中国語同様に単音節孤立語型の言語に属し、表語文字を擁する中国語と全く同様に、一語一語に<sup>・</sup>孤立的に固有の文字を要求するのである。つまり、理論的に言えば、無数の音節にそれぞれの文字を要し、同音の音節があっても意味が異なればその数だけの文字を要することになる訳である。しかも無数の中国語からの借用語をかかえ、それを原形のまま表記しつつ日本語のような「仮名まじり文」式に表記するとなると、どれが本来の漢字でどれが『字喃』であるのか区別が付きにくい。また『字喃』の表音部分も表意部分もすべて漢字の音義に拠っており、漢字の素養がなければ全くお手柄げであり、一部で言われるように、せっかくの民族文字を一部の支配者が禁じたり、文献を燃やしたりしたためにその発達が止まり、大衆への普及がならなかった<sup>10)</sup> などという性格のもものではとうていあり得ない。『字喃』は支配者の支配の道具であった漢字と正に表裏一体を成すに過ぎない別種の道具であり、漢字に精通した

9) 『字喃』の定義については、Nguyễn Đình Hòa 1959. “Chữ Nôm — The Demotic System of Writing in Vietnam,” *Journal of the American Oriental Society*, Vol. 79, No. 4, pp. 270-274; Nguyễn Khắc Kham 1974. “Chữ Nôm or the former Vietnamese script and its past contributions to Vietnamese literature,” *Area and Culture Studies*, No. 19, Tokyo University of Foreign Studies, pp. 171-189 などに詳しい。

10) Trần Văn Giáp 1969. “Lược khảo về nguồn gốc chữ Nôm,” ‘Nghiên cứu Lịch sử,’ số 127, tr. 22.

知識人層の民族主義的ロマンティシズムの表白の手段としては極めて有効であったにもかかわらず、漢字・漢文に無縁の一般大衆には「絵に描いた餅」にも等しい普遍性のないものであったことを率直に認めなければならない。<sup>11)</sup> 表を成す漢字が廃棄されれば当然その裏にある『字喃』も生き残れるはずはないのである。つまり裏は表を透かしてしか見えないものであったからである。逆説的に言えば、bilingualism を条件とするベトナム知識人たちにとっては、むしろこの俗字は俗字のままであったからこそ存在意義があったのであり、彼らの民族主義の発露という点では十分有効な役割を果たしたのである。

この俗字を正式の文字として採用しようとして空しく努力した人がベトナムの歴史上には何人か存在する。陳朝(1225—1339)を倒して1400年ちょうどに胡朝(—1413)を建てた胡季犛、西山党から出世した光中君阮恵(18世

紀末)であり、さらにはこのことを強く皇帝に建議した嗣徳帝治下の学者阮長祚(1827—71)、さらには『字喃』の創作を勧奨したり自らも筆を握った黎聖宗(1442—97)、鄭檢(16世紀中)、黎貴惇(1726—84)などがあった。<sup>12)</sup> しかし、彼らの努力が全く報われなかったのは上述のように当然の帰結であった。そして次代の民族主義を支える普遍的文字としてこれに取って代ったのは皮肉なことに西洋植民地主義者たちのもたらした世界的表音文字＝ローマ字であった。これは日本の「平仮名」と同様に、音と文字との間の一定の約束を覚えさえすれば誰にでも使用することができ、急速に民衆の間に浸透し、とくに1945年の8月革命以後は文盲を一掃し、<sup>13)</sup> 正書法としての地位を獲得したのであった。それまで『字喃』を指すのに用いていた『国語』<sup>14)</sup> という称号を、彼らは何の惜し気もなくローマ字正書法に譲ったのであった。<sup>15)</sup>

### Ⅲ 『字喃』の意義

『字喃』は上に述べた通り漢字のいわば亜流に過ぎず、文字それ自体の性格としては何ら興味を引くものではない。<sup>16)</sup> しかし、にもかかわらずこの文字の研究の重要性が叫ばれるのは、この文字がベトナムの歴史において果たした役割が決して小さくないからであり、この文字の研究もしくはこの文字によって書かれた諸文献の綿密な研究なしにはベトナム

研究はいずれの分野においても全く不完全なものに終わると言っても過言ではないからである。その理由を一言で言えば、この文字が漢文＝中国語を表記したのではなく、正に民族語＝ベトナム語を表記する唯一の手段であったからにはほかならない。

まず歴史研究の分野からその重要性を見ると、この文字はいわゆる正史を書き記すため

11) 富田「前掲論文」pp. 185-189.

12) 川本邦衛 1977. 「鳥瞰ベトナム文学論」『ベトナム』アジア・アフリカ研究所編、水曜社、p. 221; Đinh Gia Khánh, Bùi Duy Tân, Mai Cao Chương 1978. 'Văn Vi Học ệt Nam—Thế kỷ X nửa đầu thế kỷ XVIII.' Tập I, NXB. Đại học và Trung học chuyên nghiệp, pp. 226-227; 富田「前掲論文」p. 186.

13) 川本邦衛 1966. 「現代ベトナムの教育と文化—クォック・グーを中心として」『世界の文化14 東南アジア』河出書房。

14) quốc ngữ. 日本語で言う「国語」とは意味が異なり純粋に「国字」の意味である。

15) 今日のローマ字正書法の原形とも言える、現存最古の辞書は、Alexandre de Rhodes 1651. *Dictionarium annamiticum, lusitanum et latinum*. Rome (東洋文庫所蔵)であり、この普及に最大の功績を成したベトナム知識人はP. J.-B. Trương Vĩnh Ký (1837-98) と Huỳnh Tịnh Paulus Của (1834-1907) である。三根谷徹 1972. 『越南漢字音の研究』東洋文庫論叢第五十三、pp. 32-33.

16) その点では他の「疑似漢字」と言われる西夏文字や契丹文字、女真文字とは根本的に異なる。西田龍雄 1973. 「疑似漢字について」*Energy*, Vol. 10, No. 2, pp. 36-42.

にはもちろん利用されることはなかったが、ベトナム語そのもので、しかも詩の形で書かれ、吟じられた歴史長篇叙事詩の類が数多く存在し、それらは皇帝の命によって編まれ、外国語である漢文によって書き留められた正史と正に好一対を成すものであり、たとえ史的資料としての価値に乏しいとは言え、ベトナム人自身の歴史観を十分に窺わせるものである。その代表的作品は言うまでもなく、『大南国史演歌』黎呉吉、范廷倅、嗣徳 23年 (1870)

であり、またその原形とも言われる、『天南語録』作者未詳、17世紀末である。<sup>17)</sup>しかもそればかりでなく、歴史のある時点における証言とも言える詔敕、公文書の類、商業通信なども数多く『字喃』で書き留められていることを私たちは忘れることができない。今世紀の初め、維新会を起して東遊運動に先鞭をつけ、同胞に抗仏救国を訴えた潘佩珠(1867—1940)の『海外血書』には六八体<sup>18)</sup>による『字喃』と『国語』が付されており、青年たちの心をゆさぶったという事実一つ見ても、この文字およびこの文字で記されるベトナム語が、いかに深く歴史とのかかわりを持ってきたかを窺わせるに十分である。

また、文学の分野で果たした役割はとりわけ大きい。ベトナム語が中国語同様、韻文に非常に適した言語であり、しかも長い間中国語詩(漢詩)の世界になじんできたベトナム人が自らのことばによる文学の形態により多く詩を選んだとしても何ら不

思議なことではない。換言すれば、漢詩に十分鍛えられたことによって「漢越文学」<sup>19)</sup>とでも言える、外形は漢文であってもその中身は極めて民族的な独特な世界が既に形成されていたのであり、ある刺激によって加速度的に民族語による詩が噴出する下地は十分に作られていたものと考えられる。唐律をよりベトナム的に改変した韓律<sup>20)</sup>を生み出し、のちにはそれを基礎にさらに独特な六八体、双七六八体<sup>21)</sup>による詩型を完成させ、国語詩、国音詩としての独自の世界を創り上げたのであった。これを文字通り支え、はぐくんできたのが、とりもなおさず『字喃』であったのである。

国語詩の創始者として、ベトナム人はよく韓(阮)詮(13世紀末)の名を挙げる。それは以下のような歴史書の記述に拠っている。

- (1) 壬午紹宝四年(1282年……筆者) 秋八月、有鱷魚至瀘江、帝(陳仁宗……筆者)命刑部尚書阮詮為文投之江中、鱷魚自去、帝以其事類韓愈、賜姓韓『大越史記全書』卷5.57
- (2) 阮詮海陽青林人、善为国語詩賦、人多效之、後为国音詩曰韓律者以此『欽定越史通鑑綱目』卷7.26 a
- (3) 我国文字多用国語、自詮始『海東誌略』A103.38

また潘輝注の『歴朝憲章類志』には彼の国語詩集『披沙集』の名を留めているが残念ながら今日にまでは伝わっていない。その他、国語詩の達人として史書は、陳聖宗の内侍学士を務めた阮士固(13世紀末—14世紀初)や陳明宗治下の国子監司業の朱安(14世紀)、前章で挙げた胡季犛(14世

17) 『天南語録』→『越史国語』→『越史国語潤正』→『歴代南史国音歌』→『大南国史演歌』の順に完成されたものと推論されている。川本邦衛 1967. 『ベトナムの詩と歴史』文藝春秋社, p. 62.

18) thể lục bát. 平仄の交替を行いつつ六言と八言の詩句が脚韻と腰韻を踏み合せて交互するベトナム独得の詩形式。

19) Đinh Gia Khánh et al., *op. cit.*, p. 220 など参照。  
20) 国語詩を創始したと言われる阮詮 = 韓詮の名に因んでこのように呼ばれる。本文後段落参照。  
21) thể song thất lục bát. 注18)で述べた六八体の頭に七言の二句が冠せられるやはりベトナム独得の詩型。18)参照。

紀末—15世紀初)の名を留めている。しかし、彼らの作品は何一つ後代に伝わってはず、彼らの生きた陳時代に国語詩が実際に確立していたものか否か十分な証拠とは成し得ない。しかし、現存する最古の『字喃』文献として H. Maspéro<sup>22)</sup> の挙げる阮 薦<sup>グエンチヤイ</sup> (1380—1442) の『家訓歌』の存在と彼の『国音詩集』などの『字喃』作品群、また彼が仕えていた黎太祖の求めに応じて胡季犛<sup>ホーキイリ</sup> の『字喃』手詔および詩文を蒐集して献じたという史書の記述(『大越史記全書』卷11.38a)などを考え合わせてみると、やはり陳時代には既に国語詩が十分確立していたと見るのが妥当なように思われる。

ともあれ『字喃』文学は恐らく陳時代(13世紀初—14世紀末)から今世紀初めまで連続として生み出され続けてきたのであり、それがさらに現代正書法である『字国語』<sup>チヌクオツクグ</sup>に翻音され広く読み継がれていることは周知のことである。『字喃』のベトナム文学史上に果たした役割は実に測り知れないものがあると言えよう。

一方、言語学の分野からこの文字を見ると、やはり何と言ってもこの文字がベトナム語を表記する唯一の手段であったという点で重要である。ベトナム語の変韻上の変遷、語彙の交替、句法における変化などそこに含まれる問題は少なくなく、かつ魅力的である。しかし、とくに音韻の変遷という問題に限って見

た場合、以下のような最低限の認識を持つことが必要であると思われる。第1は、この文字には時間的限定が加えられないことである。この文字はある一定の時期に突然作られたものではなく、長い期間、もしかしたら千年以上もの間の蓄積によって作られたものである。しかも周知のように文字は極めて保守的で強い伝承性を持つものであり、個々の文字をある特定の時代のものとしてその背後の音韻を追求することは極めて困難である。<sup>23)</sup> 第2は、地域的限定を加えることができないという点である。換言すれば、都に限らず各地に住む人々の個人的な主張、私的な嗜好が入り込む余地が極めて多かったということである。これが『字喃』の体系化を許さない理由の一つでもあった。第3に、この文字そのものの性格上の欠陥であるが、この文字が漢字と同様に表意性もしくは表語性に大きく依存するものであり、表音的要素が相対的に小さいことである。つまり、字の背後にある音はあくまで暗示に過ぎず、それを正確に読み取ることが困難であるという点である。<sup>24)</sup> しかもそれが漢字の音=中国語音に全面的に依存するものであり、その音韻解釈上私たちは二重の障碍を背負っていると言わなければならない。

上のような認識は『字喃』研究においても『字喃』文献の翻音、解釈においても不可欠なことなのである。これを克服する若干の方法についてはのちに詳述することにしよう。

#### IV 『字喃』の構造

今日、『字喃』研究の重要さが各方面から叫ばれているにもかかわらず遅々として進展を見ないのは、単にその難解さのみに原因があるのではなく、上のような『字喃』そのもの

の持つ欠陥が災いしているのではなからうか。

それではここで、『字喃』とは一体どのような文字であるのか、その構造について一言し

22) Henri Maspéro 1912. "Études sur la phonétique historique de la langue annamite, Les initiales," B.E.F.E.O., t. XII, p. 7, note 1.

23) 三根谷『越南漢字音の研究』p. 16.

24) 漢字そのものとは異なり表音化の方向へ向かおうとする強い傾向は見られたが、『字喃』の場合、それが漢字音をベースにしたものであり限界は目に見えていた。漢字そのものが暗示的表音に過ぎないからである。

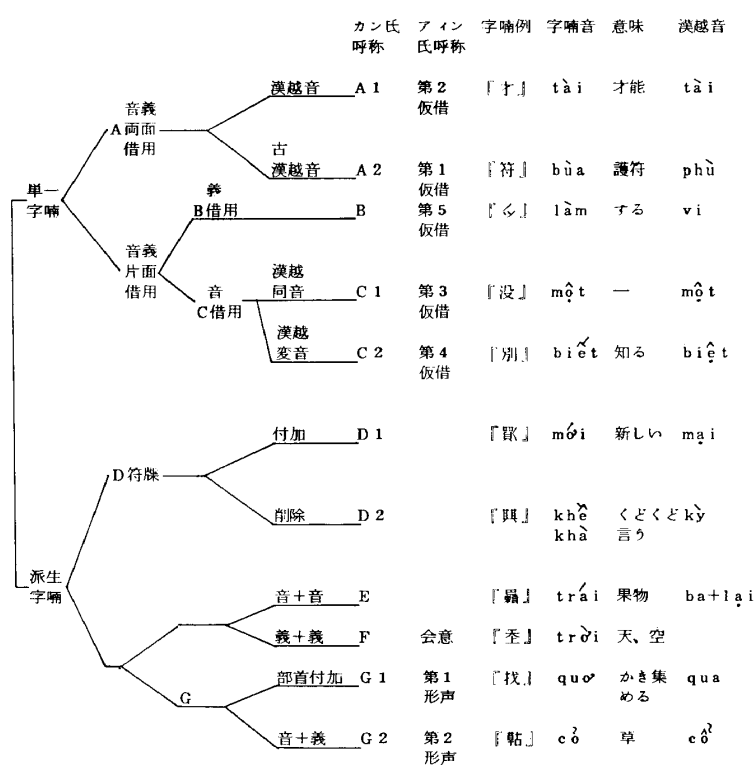


図 1

ておかなければなるまい。この文字の下位分類は細かくすれば全くキリがないので詳しくは他の場所で論じることにして、<sup>25)</sup> 最近ベトナム人言語学者グエン・タイ・カン氏<sup>26)</sup>によって提示された平易な『字喃』分類を筆者なりに若干整理して図表化し、それに沿って簡単に説明を試みてみよう。上表のローマ字アルファベットと数字がカン氏の分類記号で、その右隣に、のちに詳しく紹介することにして

25) 『字喃』の分類については多くの学者がいろいろな所で論じているので参照されたい。

- 三根谷「安南語」および『越南漢字音の研究』  
Nguyễn Khắc Kham, *op. cit.*  
Nguyễn Quý Hùng 1965. “Chữ Viết,” ‘Văn Phạm Việt—tự ngữ học, phân tích học,’ Saigon, pp. 151–227.  
Dương Quảng Hàm 1942. “Le Chữ Nôm ou Ecriture Demotique. Son importance dans L’Etude de L’Ancienne Litterature Annamite,” *Bulletin Général de L’instruction Publique*, No. 7.  
Nguyễn Đình Hòa, *op. cit.*  
藤堂『前掲書』

の全般についてまっこうから取り組んだ最初の学者とも言えるダオ・ズイ・アイン氏<sup>27)</sup>の分類呼称を付しておいた。

『字喃』は左表のようにまず大きく二つの範疇に分けられる。すなわち、漢字を原形のままでベトナム語に適合させる「単一字喃」、つまり「仮借字喃」と、漢字にある種の加工を施したり2—3個の漢字を重ね合わせた

りしてベトナム語に適合させる「複合字喃」または「派生字喃」<sup>28)</sup>の二つである。まず「単一字喃」から見てみると、これはさらに二つに分けられ、漢字の音と義の両方をとともに使用するもの(A)と音か義のどちらか一方を借用するものがある。

音義両面の借用にはこれまた2種類あり、漢字を原形のままで音義ともに受け継いだもの(A1)とベトナム漢字音<sup>29)</sup>が成立する以前の、つまり中国唐代以前の漢代、六朝時代の古い伝統的音をそのまま受け継いでベトナム語化した俗に言う「古漢越音」<sup>30)</sup>を表現する『字喃』(A2)があり、とくに後者の『字喃』はそれが頻出する度合によって、時代確定の不明な『字喃』文献の時代確定作業の重要な根拠になり得るものであり、

- 26) Nguyễn Tài Cẩn, Xtan-ke-vich, N. V. 1976. “Diêm qua vài nét về tình hình cấu tạo chữ Nôm,” ‘Ngôn Ngữ,’ số 2, pp. 15–25.  
27) Đào Duy Anh 1975. ‘Chữ Nôm, nguồn gốc, cấu tạo, diễn biến.’ Hanoi.  
28) Cẩn氏はこれを「自造字喃」chữ Nôm tự tạoと呼んでいる。Cẩn, *op. cit.*, pp. 18–25.  
29) 紙数の都合でベトナム漢字音＝漢越音について全く触れることができなかったが、以下の諸論文を参照されたい。  
三根谷『越南漢字音の研究』; H. Maspéro, *op. cit.*; 王力 1958. 「漢越語研究」『漢語史論文集』pp. 290–406; 藤堂『前掲書』および 1957. 『中国語音韻論』江南書院; 富田『前掲書』pp. 4–5.  
30) 王力「前掲論文」などの呼称に従った。

ン氏はこれを「第1仮借」としてあとに述べるように極めて重視している。<sup>31)</sup>

次に、漢字の音もしくは義のどちらか一方を借用する『字喃』のうち、日本語の訓読法のように音には全く関係なく義のみを借用するものがB（例字は「為」の省画形）で数の点ではそれほど多くはない。<sup>32)</sup> 一方、意味には全く無関係に音だけを借用するもの(C)は、漢越音と全く同音のベトナム語音に利用されるもの(C1)と漢越音と音的類似はあるが声母（語頭子音）もしくは韻母（介母音、主母音、語末子音を含む）もしくは声調がやや異なるベトナム語音を暗示的に示すもの(C2)の2種類がある。

以上が「単一字喃」もしくは「借用字喃」であるが、次に「複合字喃」もしくは「派生字喃」と呼ばれる『字喃』に話を移そう。

まず第1に、日本語で言えば「おどり字」<sup>33)</sup>に似たような符牒を右肩に付したり、漢字の部首を純粹に符牒化して小さく左肩に加えて漢字との区別を表示したもの(D1)と、逆に漢字の一部を削除することによってベトナム語音を暗示的に表示したもの(D2)がある。<sup>34)</sup> 後者は数の点ではごく限られたものである。

「複合字喃」にはさらに音と音とを組み合わせる方式のもの(E)がある。これはたとえば日本国字の「𪛗」や「𪛘」にその類例を見

出すことができるが、<sup>35)</sup>『字喃』の場合は現代ベトナム語では既に消滅してしまった声母の子音群(consonant cluster)を暗示的に示したものであり、その存在の名残りを留める極めて注目すべき種類の『字喃』である。しかし、これも残念ながら数の点ではごく限られている。<sup>36)</sup>

また、音には全く無頓着に意味同士を組み合わせるいわゆる「会意」形式のもの(F)があり、これも日本国字の「𪛙」や「𪛚」にその類例を見出すことができる。<sup>37)</sup> 事物、事象を概念化する際のベトナム人の思考様式の一端を窺わせる興味深いものであるが、これも数の点で限られている。<sup>38)</sup>

最後は、これが「複合字喃」としては最も一般化した方式であったが、意義を担う漢字と音を担う漢字を組み合わせるいわゆる形声（諧声）方式の『字喃』である。<sup>39)</sup> これにはまた、漢字の部首または『字喃』特有の部首（「巨」と「司」）を付加するもの(G1)と漢字そのものを原形のまま義符として添えるもの(G2)の二つがある。

『字喃』は大体以上のように分類されるが、『字喃』研究およびその文献解読には漢字と漢越音に精通することはもちろんのこと、上のような構造を把握することも不可欠な条件であることは言うまでもない。<sup>40)</sup>

## V 『字喃』の起源

『字喃』が一般に普及しなかった原因はいくつか考えることができたが、だからと言ってこの文字が全く私的なもので勝手気儘なものでなかったことは上の構造を見ても明らか

である。自由な部分はかなり残しながらもそれなりの体系を成した文字であったことを私たちは認めなければならない。

31) Đào Duy Anh, *op. cit.*, pp. 66-76.

32) Cản氏によると彼らの資料では約40個に過ぎないと言う。Cản, *op. cit.*, p. 21, footnote 11.

33) ベトナム語では dấu nháy 「ウィック・マーク」と呼びならわしている。

34) 中国語の簡体字にこれと酷似した「乒乓」(pīng pāng=ping pong)があるのは周知の通り。

35) 朝鮮の国字（漢字を改造したものという意味）の「𪛛」(kal)や「𪛜」(kos)なども同様の範疇に属すだろう。藤本幸夫 1973. 「朝鮮の国字」*Energy*, Vol. 10, No. 2, pp. 43-45.

36) de Rhodes, *op. cit.* の辞書には、今日既に失われてしまった子音複合 bl-, ml-, tl- がまだ登録されている。例字の trái は辞書では blái.

37) 朝鮮の国字「𪛛」(「敷地」の意)や「𪛜」(「嶺」「峠」の意)などもこの範疇に属すと言えよう。藤本「前掲論文」pp. 43-44.



それではこのような体系を成す文字としての『字喃』はいつごろ発生したのであろうか。『字喃』の起源について内外の学者の間に意見の対立を生じている原因は、『字喃』の、文字としての発生と体系を成す文字としての発生を明確に区別していない点にある。そこで本論考ではこの点を明確に区別してこれまでの代表的な諸説を簡単に紹介してみようと思う。

### (1) 『字喃』の文字としての発生

#### A 1世紀前後説

前漢の平帝の時に交趾太守として赴任した錫光と後漢の光武帝によって九真の太守に任じられた任延の時代、両者による住民教化政策の過程で発生したとする。(『越史略集』<作者未詳>、ホア・バン氏<sup>41)</sup>)

#### B 2-3世紀説

日本における王仁に似てベトナムにおける漢学の祖、「南交学祖」として崇められる士燮 = 士王によって始められたとする。以下はその代表的主張である。

・「士王我国に來りて40年余、人を教化伝播せしむるに我俗語を用いて義を説き漢字の文句に通ぜしむ。呼び名を記す国語詩を集め韻に従いて『指南品彙』上下二巻を成す」(『指南玉音解義』<15世紀?>)

- 38) Cần 氏によると約20例に過ぎないと言う。  
Cần, *op. cit.*, p. 23, footnote 17.
- 39) 朝鮮の国字「獮」(tjøn「山羊」)や「𧈧」(so「舟虫」)などの存在も興味深い。藤本「前掲論文」p. 43. いずれも声符が主で義符が従であろう。
- 40) 「字喃」の構造については以下の論文、辞書に詳しいので参照されたい。  
聞宥 1933. 「論字喃 (Chữ Nôm) 之組織及其与漢字之関涉」『燕京学報』14期, pp. 201-242.  
山本達郎 1935. 「聞宥氏, 『論字喃 (Chữ Nôm) 之組織及其与漢字之関涉』」『東洋学報』12. 2, pp. 140-151.  
Nguyễn Quang Xi, Vũ Văn Kính 1971. 'Tự Điển Chữ Nôm (『字典字喃』).' Trung Tâm Học Liệu, Saigon.
- 41) Hoa Bằng 1970. "Về vấn đề chữ Nôm, Góp ý với ông bạn Trần Văn Giáp về bài «Nguồn gốc chữ Nôm», " 'Nghiên cứu lịch sử,' số tháng 8, tr. 57-62.

・「列国言語不同、一国有一国語、我国、自士王譯以北音、其間百物猶未詳識、如睢鳩不知何鳥、羊桃不知何木、此類甚多、是書註以国音、庶得備攷、或有易知者、亦不必註」(『大南国語』<義例篇> 文多居士 1880)

・「漢靈帝の頃中国から逃れて来た無名、有名の学者を士燮が保護または利用して、自分の威信、政治権力を鞏固にするためにベトナム人に漢学思想を教授させた」(チャン・ヴァン・ザップ氏<sup>42)</sup>)

・「士燮はベトナム人に漢字を教え、記憶させる際の工夫として、『字喃』を考案した。しかも彼は中国旧広西省蒼梧郡広信の人であり、昔からその土地で広く用いられていた『字喃』によく似た俗字に親しんでいた」(ソー・クオン氏<sup>43)</sup>)

#### C 8世紀説

馮興の死後の尊称「布蓋大王」中に見える「布」(ベトナム語で「父」の意味)、「蓋」(ベトナム語で「母」の意味)という二つの『字喃』の存在を根拠とする。(グエン・ヴァン・トー氏,<sup>44)</sup>ズオン・クワン・ハム氏<sup>45)</sup>)

#### D 10世紀説

丁朝の国号「大瞿越」中に見られる「瞿

42) Trần Văn Giáp, *op. cit.*

43) Sở Cường 1932. "Chữ nôm với Quốc ngữ," *Nam Phong*, No. 172, pp. 495-496. なお、氏によると中国宋代の『嶺外代答』には『字喃』によく似た次のような文字が記されていると言う。(Ibid., p. 496).

「𧈧」(小さい)、「𧈧」(静かな) etc.

また、聞宥氏が研究した『広西大平府訳語』にも以下のような文字が見えると言う。(西田「前掲論文」p. 42).

「𧈧」(lao 星)、「𧈧」(khai 月) etc.

さらに現代広東語における以下のような表記法も興味深い。(中嶋幹起編 1977. 『粵語常用語彙集』アジア・アフリカ言語文化研究所)。

「𧈧」(leih 舌)、「𧈧」(ná メス) etc.

44) Nguyễn Văn Tố 1930. "Langue et littérature annamites: Notes critiques I," *B. E. F. E. O.*, t. XXX, pp. 141-145.

45) Dương Quảng Hàm 1943. 'Việt Nam Văn Học Sử Yếu.' Hanoi, tr. 113-120.

(ベトナム語で「突出した」の意味)の字の存在に基づく。<sup>46)</sup> (グエン・ヴァン・トー氏<sup>47)</sup>)

(2) 『字喃』の体系を成す文字としての発生

A 8—9世紀説

歴史音韻論の立場から、『字喃』がベースとするベトナム漢字音の確立以前にはこの文字の発生はあり得ず、ベトナムが独立の時代に入ろうとする瞬間に出現したとする。(グエン・タイ・カン氏<sup>48)</sup>)

B 10世紀説

漢字音が形成され始めた8—9世紀よりやや遅れ、905年のいわゆる「<sup>フック</sup>曲氏建業」を一つの境として、938年呉朝成立、968年<sup>ダイ</sup>丁朝成立、980年<sup>レ</sup>黎朝成立へと至る自主時代に胚胎し、1010年に始まる<sup>リ</sup>李朝時代には十分確立していたと見る。<sup>49)</sup> この説の根拠についてはあとに詳しく紹介する。(ダオ・ズイ・アイン氏<sup>50)</sup>)

C 12—13世紀説

第3章に述べたような歴史書の記述によって<sup>ハントウエン</sup>韓詮の時代を『字喃』の発生と一応見な

す。また、1343年(陳<sup>チャンズートン</sup>祐宗、紹<sup>テイエウフォン</sup>豊<sup>ニン</sup>3年)の寧<sup>ニン</sup>平<sup>ビン</sup>省(現ハナムニン省)の護<sup>ホー</sup>城<sup>タインソン</sup>山の石碑を『字喃』最古の碑文とし、阮<sup>グエン</sup>薦<sup>チャイ</sup>の『家訓歌』<sup>ザーファンカー</sup>を最古の文献として挙げ、『字喃』は陳朝に至るまでに既に久しく存在し、発展していたのかも知れないとする。<sup>51)</sup> (H. Maspéro 氏,<sup>52)</sup> P. Pelliot, L. Cadière 氏<sup>53)</sup>)

以上のような諸説<sup>54)</sup>は多くは未だ臆断の域を出ていないと思われるが、最近になって歴史音韻論を導入し、『字喃』の構造そのものの変遷を詳しく究明することによってその起源を辿ろうと言う方向が提起されつつあることは極めて注目すべきことである。中でもダオ・ズイ・アイン氏の最近の研究は非常に興味深いものがある。以下では主として氏の研究を紹介しつつ『字喃』の構造そのものの変遷を辿り、またそれが『字喃』の起源を求め作業に果たして有効な力を発揮することができるのか否か詳しく検討を加えてみようと思う。

VI 『字喃』の変遷

アイン氏は『字喃』を時代的に大きく三つの段階に分けている。そしてその各段階における代表的作品を抽出しそれらの作品中の『字喃』の構造を一つ一つ分析し、先に紹介したような分類を施しその一つ一つの種類の文字を数量化し全体の中に占める割合を出す。そしてそのような作業をすべての作品に適用してその変遷の大まかな傾向を調査する。一口

に言えば氏の研究はこのようなものである。

まず氏が取り上げた文献について若干紹介しておかねばなるまい。

46) 上の両『字喃』は黎<sup>レ</sup>文<sup>フ</sup>休<sup>フ</sup>の『大<sup>ダイ</sup>越<sup>グ</sup>史<sup>シ</sup>記』(1272年完成)には登録されていず、呉<sup>フ</sup>士<sup>シ</sup>連<sup>レン</sup>編<sup>ベン</sup>の『大<sup>ダイ</sup>越<sup>グ</sup>史<sup>シ</sup>記<sup>ダイ</sup>全<sup>ケン</sup>書』(1697年上梓)になって初めて記録されていることをもってこの説に疑いをさしはさむ人もいる。(Đào Duy Anh, *op. cit.*, p. 42).  
47) Nguyễn Văn Tố, *op. cit.*  
48) Nguyễn Tài Cần 1971. “Cứ liệu ngữ âm học lịch sử với vấn đề thời kỳ xuất hiện của Chữ Nôm,” ‘Ngôn Ngữ,’ số 1, tr. 41.

49) 東アジア地域につぎつぎに発生した諸疑似漢字との関連も考えられる。当時の状況を、西田「前掲論文」p. 36より引用しておこう。

「東アジア地域で、十世紀頃になると、中国周辺の有力民族は、次々に固有の文字を持ちだした。それまで漢文を唯一の通達手段としていた民族が、漢文にかわって自国語を、自国の固有文字によって、しかも漢字に対抗できるような重厚な字形を具えた文字を作り出して、書き表わそうとした。まずその代表的な動きが、漢字に似せた字形の文字を作る方向となってあらわれた……」

50) Đào Duy Anh, *op. cit.*

51) 護<sup>ホー</sup>城<sup>タインソン</sup>山の石碑を確認したものは誰もいず、しかも『家訓歌』も後代の偽作と見る説が最近有力である。これらを『字喃』最古の資料とするのは問題であろう。

<第1段階>

1) 雲本寺の銅鐘<sup>55)</sup>

字数が余りに少な過ぎて体系的な資料とは成し難いものであるが、1958年に漁民が偶然、海底から引き上げたドー・ソンの雲本寺の銅鐘で、11世紀後半(1058年に建立されたドー・ソン塔に遅れること18,9年の1076年ころと見られる)の李仁宗時代つまり李朝半ばのものと思われる。

2) 報恩寺の碑文

13世紀に Maspéro の言う現存最古体系化(?) の『字喃』碑文つまり護城

山の碑文を捜し求めているうちに、これまた偶然に発見されたヴィン・フー省イエン・ラン県タップ・ミエウ社の報恩寺にある李朝末李高宗時代の治平龍応5年(1209)の銘のある碑文であり、そこに刻された20個以上の互いに異なる『字喃』は今日、目にし得る『字喃』と根本的には全く異ならない既に確固とした体系を成したものであると言う。つまり既に13世紀の初めには『字喃』は十分に体系化されており、それ以前にかなり久しい時間的経過があったことを推測せしめる証拠と成し得るものである。Maspéro の言う現存最古の碑文が正しく彼の言うように1343年のものであるならば、それに先んずること1世紀と30数年前には既に十分体系化された『字喃』が石碑の上に刻み込まれていたことになるわけである。

- 52) H. Maspéro, *op. cit.* ただし碑文に記されているという20個の村名を一つも挙げていない。  
 53) P. Pelliot, L. Cadière 1904. "Première étude sur les sources annamites de l'histoire d'Annam," *B.E.F.E.O.*, t. IV, p. 62.  
 54) その他の説については以下の論文参照。  
 Vuong Loc 1975. "Coup d'œil sur l'évolution de la langue vietnamienne," *Etudes Vietnamiennes*, No. 40, pp. 15-18.  
 55) Trần Huy Bá 1963. "Một quả chuông 700 năm dưới đáy biển," "Tô quốc," số tháng 3 で初めて紹介されたものであるが、年号確定には未だ疑いが残る。

3) 『禪宗本行』8賦中4賦

A 「居塵樂道」

B 「得趣林泉成道」

(陳仁宗 1258—1308)

その文体(詩型)、『字喃』使用法、語句の新旧、内容に至るまですべての角度からの分析によってこれが陳仁宗その人の賦であることを氏は詳しく論証している。もしこの説が正しいとするならば Maspéro の言う現存最古の文献『家訓歌』よりやはり1世紀以上も古い時代の『字喃』ということになる。

C 「詠花安寺」(竹林派第三祖玄光)

玄光自身の賦か否かは疑いが残るとしても陳代のものであろうと言う。

D 「教子」

状元莫挺之の死して陰府に入りてより7日、地獄を垣間見て、生きかえりて子供に教えるの賦とあると言うが内容的には4篇の賦中最も劣っており後代の付会ではないかとする。にもかかわらずその用字法から陳代のものであると断定し得る多くの要素を有していると言う。

その他、陳代末までのこの段階に入れることが可能と思われる作品に次のものを挙げている。

4) 『禪宗課虚語録』(慧浄禅師)

禅師は陳末の陳睿宗時代の人であると言う説が最近有力で、その用字法からもこの作品は陳朝末遅くとも黎朝初期のものではないかとしている。因みにこの作品はかの有名な仏学書、陳太宗(1218—77)の『課虚録』の解釈本である。

<第2段階>

1) 『指南玉音解義』

六八体で書かれた一種の漢越字典であり、氏によると極めて貴重で科学的価値のある文献と言う。現在目にし得るものは1761年(景興22年)の刻印本ではあるが後代の改変は少

なくその用字法は次に述べる<sup>グエンチャイ</sup>阮<sup>クオック</sup>薦の『<sup>アムテイタツブ</sup>国音詩集』に近くそれよりもやや古いものではないかと言う。いずれにしる黎朝初期のものであろうと言う。

2) 『国音詩集』

<sup>グエンチャイ</sup>阮薦の最も有名な『字喃』詩集で、彼の<sup>ウツクチャイズイタツブ</sup>『抑齋遺集』の第七章を占めるものである。古い『字喃』の形態を留める黎朝初期の作品と言う。

3) 『洪徳国音詩集』

<sup>ホンドウツククオックアムテイタツブ</sup>洪徳<sup>レ-タイントン</sup>国音詩集』<sup>ダムヴァンレ-</sup>潭文礼によって黎聖宗(1460—97)の主宰する<sup>タオダシ</sup>騒壇会のメンバー二十八宿の詩を蒐集したものと言われ、聖宗の晩年または没後に成ったものとされている。黎朝聖宗治下で見事花開いた『字喃』による民族語詩の代表ともされるものである。

<第2—第3段階過渡期>

『<sup>チユエンキ-マンルツクザイアム</sup>伝奇漫録解音』

1527年に起こった<sup>マツク</sup>莫朝の末、すなわち16世紀末ごろ世に出たと言われている<sup>グエンズ-</sup>阮璵の<sup>チユエンキ-マンルツク</sup>『伝奇漫録』を同時代の<sup>グエンテ-ギ-</sup>阮世宜が解音したものであり、その用字法は第2段階から第3段階の過渡期的状況を示していると言う。

<第3段階>

1) 『花箋記』

中国明朝の通俗小説を<sup>グエンフィトク</sup>阮輝似(1743—90)が韻文詩の形式に翻訳=<sup>ズイエンアム</sup>演音した<sup>ホアテイエン</sup>『花箋<sup>チユエン</sup>伝』のいわば原形とでも言えるもので、輝似の家族が手写して久しく家蔵していたものが最近発見され、1961年にアイン氏たちによって<sup>クオックグ-</sup>国語字に翻字されたものである。『花箋伝』に比べその『字喃』の使用法が原本により近いと言われ、18世紀末黎朝末期のものと思われる。

2) 『<sup>キムヴァンキエウタンチユエン</sup>金雲翹新伝』

ベトナムの国民文学の最高傑作、古典の代表作品、民族のこぼの宝庫など数々の形容詞を冠され、ベトナム人に今日でも最も愛読されている古典文学作品の一つであり、中国

の通俗小説の演音であると言う点でも、『字喃』による六八体詩であると言う点でも最も典型的な作品と言えよう。阮朝初期の阮攸(1765—1820)の作品である。

3) 『<sup>ダイナムクオックス-ズイエンカ-</sup>大南国史演歌』

第3章参照。その用字法はかなり原則的でこの時代の代表として信頼に足る作品であると言う。これまでに挙げた他の諸作品と異なり歴史叙事詩であり、借用漢語(とくにカン氏の言うA1)の比率が高くなることはやむを得ない。

アイン氏は以上の諸作品をそれぞれの段階の代表として挙げ、このうち第1段階の全作品、第2段階の『国語詩集』、第3段階の『花箋記』と『大南国史演歌』について、具体的数字を挙げてその『字喃』使用法を浮き彫りにしその変遷を辿っている。次頁の表はそれを図表化してまとめたものである。数字に若干矛盾するところがあり修正可能な部分ではできるだけ修正したが、不可能な部分はそのままにしておいた。

取り扱われた文献の数が少なく、そこから断定的な結論は引き出し難いが、その構造の変遷に見られる一般的傾向を描き出すことは可能である。氏の仮説をさらに簡略化した98ページの図を参照しながら論を進めよう。

すなわち、『字喃』の発生から揺籃期にかけての第1段階では圧倒的に漢字を原形のまま借用するいわゆる仮借字が多く、中でもアイン氏の言う第1仮借、第2仮借の占める割合が高い。(報恩寺碑文で、第1、第2仮借より第3、第4仮借が圧倒的に多いのは、ベトナム語の地名、人名を多く書き記しているためである)。しかも漢字音確立以前の、つまり唐代以前の中国音を直接保存する、アイン氏の言う第1仮借字の頻出率が全体として高いことも興味深い。またこの段階において既に形声文字も安定した頻度を保ち、この時期には既に借用漢字のみでベトナム語を暗示すること

表 1

	『字喃』 総字数	A 2 第1 仮借	A 1 第2 仮借	C 1 第3 仮借	C 2 第4 仮借	B 第5 仮借	G 1 第1 形声	G 2 第2 形声	F 会意
<第1段階>									
1) 雲本寺銅鐘	2		1	1					
2) 報恩寺碑文	24	1 5%	2 8%	13 54%	2 8%		6 25%		
3) 『禅宗本行』(8賦中4賦)									
A 「居塵楽道」	1482	112 8%	807 54%	128 9%	316 21%		357 24%		
B 「得趣林泉成道」	336	13 4%	156 46%	34 10%	93 28%		70 21%		
C 「詠花安寺」	642	60 9%	225 35%	63 10%	113 18%		176 28%		5
D 「教子」									
4) 『禅宗課虚語録』	序文 300	10 3%	100 33%	39 13%	100 33%		?		
<第2段階>									
1) 『指南玉音解義』									
2) 『国音詩集』	538	32 6%	144 27%	54 10%	151 28%		121 22%		5
3) 『洪德国音詩集』									
<第2—第3段階過渡期> 『伝奇漫録解音』									
<第3段階>									
1) 『花箋記』	頭2章 303	23 8%	96 34%	28 9%	54 15%		100 33%		2
2) 『金雲翹新伝』									
3) 『大南国史演歌』	頭100句 700	33 5%	372 53%	37 5%	90 13%		90 13%	71 10%	7

の不可能なことが認識されていたのではないかと思われる。ところが第1段階の終わりに位置する『禅宗課虚語録』あたりを境にして第1および第2仮借字が目立って減り始める。つまり漢語をそのまま音義ともに借用する度合が減りその代りにベトナム語そのものが表面に現われてくるのである。それは第4仮借(C2)の漸増という形で現われているのでは

ないかとアイン氏は推測する。もう一つの傾向は、次の第2段階において一旦形声文字が減少することである。つまり、声符と義符の複合という造字の原理の当然の帰結として、複雑化し過ぎたこの種の文字が逆に簡易化を目ざして再び仮借の字を利用する方向へと逆戻りする。これも第4仮借へ流れ込んだのではないかとアイン氏は推測する。そして第3

カン氏分類	アイン氏分類
A 1	第2 仮借
A 2	第1 仮借
B	第5 仮借
C 1	第3 仮借
C 2	第4 仮借
D 1	
D 2	
E	
F	会意
G 1	第1 形声
G 2	第2 形声

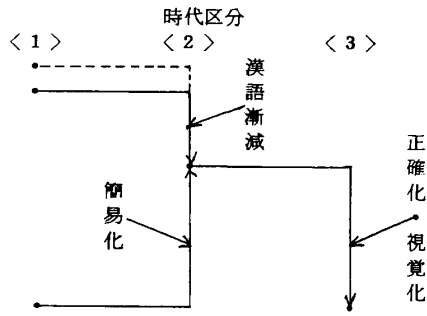


図2

の段階になると、上の傾向は益々助長される一方、上で増加した第4 仮借字つまりベトナム漢字音でベトナム語音を暗示的に示していたものが、漢字音の保守性が語音の変化について行けず、その甚だしい乖離ゆえに、さらに合理化、正確化、視覚化を目指して再び形

『字喃』の構造を一層細分類しつつこの作業を進めるならば『字喃』の新旧を計る、否、時代確定の不明な『字喃』文献の新旧をも計り得るいわば「カーボン14」のような基準が得られるのではないかと期待される。

声文字に頼ろうとする傾向が出て来ると言う。この時期に『字喃』は爛熟期を迎えることになるわけである。氏の仮説が十分に説得性を持つためには、さらに多くの『字喃』本についても同様の統計的作業が成されることが必要であると思わ

## Ⅶ お わ り に

未解読、未翻音のままベトナムの図書館およびベトナム各地に、さらには旧宗主国のフランスの図書館、博物館に眠っている『字喃』文献は恐らく数千にも上ると思われる。<sup>56)</sup> 漢字、『字喃』ともに廃絶されたいまとなってはそのまま目の見ないで終わってしまう公算が大である。このような事態はベトナム人にとってもベトナムを研究する私たちにとっても最大の損失と言わなければならない。ア

イン氏はその非を鳴らし、とくに若い人に『字喃』研究の重要性を呼びかけ、その具体的研究方法まで平易に解説している。

『字喃』研究の必要条件はまず漢字に精通すること。十分条件はその構造を知りその起源と各時代における変遷を把握すること。さらにこれらの条件を満たすため、その背景となるべきベトナム語と漢越語の歴史音韻論的知識が是非とも必要とされることをくり返し主張している。全く同感である。

56) ベトナムの社会科学図書館だけでも1,186冊に上ると言う。Anh, *op. cit.*, p. 9.